様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０７０

研究課題名（和文）イスラーム動態からみる近代中央アジアの遊牧社会史研究：クルグズを中心に

研究課題名（英文）A study on the social history of nomads in modern Central Asia from perspective of the dynamism of Islam: in case of the Kyrgyz

研究代表者
秋山　徹（Akiyama, Tetsu）

早稲田大学・イスラーム地域研究機構・助手

研究者番号：９０７０４８０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：中央アジア近代史の再構成を進める上で、イスラームが重要な鍵となることは言を俟たない。本研究はこうした問題関心に基づき、近代中央アジアの遊牧社会をイスラームの動態という視点から明らかにすることを目的とする。その際本研究は、天山山脈周辺に居住する遊牧民クルグズの首領層に主眼を置く。本研究は、イスラーム世界やロシア帝国というグローバルな文脈との相互連関性に留意するものであり、イスラーム地域研究の観点に立脚した遊牧社会史研究を進展させ、中央アジア近代史の再構築に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：When we reconstruct the modern history Central Asia, the Islamic factor plays an important role. Based on this understanding this study aims at investigating nomadic society of modern Central Asia from the viewpoint of the dynamism of Islam. For this purpose this study takes up the chieftains of the Kyrgyz nomads, who inhabited the highland areas of the Tian Shan Mountains. This study pays attention to the mutual relationship with the global context, including the Russian Empire and the Islamic world. This study contributes to the reconstruction of the history of modern Central Asia by investigating the social history of nomads from the view point of the Islamic area studies.

研究分野：東洋史

キーワード：イスラーム　遊牧　帝国　中央アジア　中央ユーラシア　内陸アジア

１．研究開始当初の背景

（1）1980 年代後半に始まったペレストロイカとソ連解体以後、ソ連時代のイデオロギー的な制約が解かれ、これまでアクセスが不可能であったおびただしい史料が公開された。それに伴い、新たな研究環境を獲得した中央アジアの近代史研究はめざましく進展しつつある。

（2）この中央アジアという地域が、古来より様々な遊牧集団が興亡を繰り返す舞台となってきたことは周知のとおりである。こうした遊牧民の歴史をめぐる従来の研究の傾向として、彼らが世界史の原動力として活躍した近世以前（モンゴル帝国を顕著な例として）が「陽」のイメージで描かれてきた反面、近代以降の彼らの動向は「陰」のイメージで認識される傾向にある。すなわち 18 世紀以降、中央アジアがロシアと清という二大帝国の膨張とともにその周縁と化す中で、遊牧民は騎馬軍団に基づくかつての機動性を削がれ、主体的なアクターとしての役割を喪失してゆく側面が強調されてきた。こうした研究潮流を踏まえ、研究代表者はこれまで、新たに開拓された史料に依拠しつつ、中央アジア史のいわば「陰画」としての遊牧民の歴史、すなわち近代中央アジアにおける遊牧社会史を、天山山脈周辺を遊牧するクルグズ（キルギス）の首領層に焦点を当てながら再考してきた。

（3）こうした全体構想に基づきつつ、研究代表者は申請時に至るまで以下の二つの側面から研究を進めてきた。第一に、クルグズ遊牧社会をロシア帝国の異民族統治政策との関係の中に位置づけることを試みた。第二に、ロシア統治下におけるクルグズ遊牧社会の動向を、ロシア帝国との二者関係においてのみ把握するのではなく、中央アジア遊牧社会のテュルク・モンゴル的伝統の中にも位置づけるべく考察を進めてきた。その成果として、クルグズ首領層の権威は、中央アジア遊牧世界に古くから存在する勇士（バートゥル）としてのそれに根差すものであり、そのような称号を帯びることが、ロシア統治の進展後も一定の意義を持ち続けたことを明らかにした。

２．研究の目的

以上に示した二つの側面に加えて、クルグズ遊牧社会のみならず中央アジア近代史の再構成を進める上での重要な鍵となるのがイスラームであることは言を俟たない。イスラームはソ連時代の無神論イデオロギーのために不当に軽視されてきたが、昨今ではイスラームが中央アジア史において果たしてきた役割が再評価されるとともに、ウズベキスタンをはじめとする定住民地域を中心とする研究が進展し、「イスラーム地域」としての中央アジア近代史の様態が解明されつつある。その反面、定住民地域と並んで中央アジアを構成する重要な要素である遊牧民地域について見ると、ロシア・清両帝国をはじめとする帝国の異民族統治史や国際関係史の中に位置づける研究が先行しており、同地域のイスラーム地域としての側面を解明する研究は端緒についたばかりであると言える。中央アジアの諸勢力の中でも、イスラーム化するのが最も遅かったクルグズに関しては、彼らがイスラームを受容しつつも、シャーマニズムやアニミズム的要素を色濃く残していたという指摘はあるものの、クルグズ遊牧社会をイスラーム地域としての側面から分析する本格的な研究はこれまで存在しなかった。このような問題関心ならびに研究状況を踏まえ、本研究は、18 世紀から 20 世紀中期にかけてのクルグズ遊牧社会の実相を、イスラーム動態という視点から明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

（1）本研究は、近代におけるクルグズ遊牧社会のイスラーム地域としての様相を、①中央アジア定住地域、②ロシア帝国内地のイスラーム地域、および③オスマン朝を盟主とするスンナ派イスラーム世界との関連性を踏まえながら明らかにする。同時に、イスラーム的側面を自己完結したものとして捉えるのではなく、前述したロシア帝国による統治や中央ユーラシアの遊牧的伝統といった諸側面との相互関係の中に位置づける。その際、本研究は、シャブダン・ジャンタイという一人のクルグズ部族首領の生涯に着目し、そのライフヒストリーを再構築することで、同時代の状況を浮かび上がらせるという手法を用いる。

（2）本研究は、文献史資料の読解による歴史学的手法に基づくものである。この課題を達成するために、カザフスタン共和国国立中央公文書館をはじめとする中央アジア諸国の公文書館に収蔵されるロシア帝国植民地軍政当局の軍事・行政文書を中心的に用いるが、それ以外にも、同時代のクルグズ人自身によって執筆された系譜書や墓碑、ならびに上述のシャブダンの子孫のもとに収蔵されている民間所蔵史料を用いる。

４．研究成果

（1）シャブダンが生前において熱心なムスリムであったことはよく知られている。本研究では、まずシャブダンのイスラーム信仰の基層を明らかにした。クルグズ遊牧民のイスラーム化は 16 世紀にまでさかのぼり、シャーマニズム的な性格を帯びたものであったことが知られているが、クルグズ遊牧社会におけるイスラーム化は確実に進展していた。その度合いは，特にコーカンド・ハン国と密接な関係にあったフェルガナ盆地周辺のクルグズにおいてより顕著であり、天山山脈北

部のセミレチエにもその波は及んでいた。
こうしたイスラーム化の背景にあったのがスーフィズムである。シャブダンがいつ、何を契機としてイスラームに傾倒するようになったのか。このことについては、史料的な制約もあり定かではない。とはいえ、その背景にこうしたスーフィズムの影響があったことは確かであると思われ、実際に、シャブダンがイシャーンの熱心なムリードであったことを史料から確認した。

（2）20 世紀に入ると、前節で見たようなスーフィズムを媒介とする、言わば伝統的なイスラームのあり方に加えて、シャブダンのイスラームへの関わりかたがより可視的な性格を帯びるようになっていったことが明らかとなった。そうしたことを示すものとして本研究が着目したのは、イスラームの聖地マッカとマディーナへの巡礼、すなわち「ハッジ」である。19 世紀後半以降、蒸気船や鉄道をはじめとする交通機関の発達を背景として、イスラーム世界の僻地からも巡礼者が訪れるようになったことがよく知られているが、領内におおくのムスリム人口を擁するロシア帝国も、こうした潮流と無縁ではなかった。実際に、ロシア帝国統治下の中央アジアにおいても、19 世紀末以降、鉄道の敷設の進展にともなって比較的おおくのムスリムが聖地を目指すようになった。ロシア軍政当局の公文書史料中には、巡礼者へのパスポート発給記録がのこされているが、クルグズが居住するセミレチエ州のピシュペク郡だけでも、1902 年から 1906 年にかけて毎年 50 名近くのクルグズにパスポートが発給されていたことが明らかとなった。こうした流れの中で、シャブダンも 1904 年 12 月から翌 1905 年 5 月にかけてハッジを敢行した。ハッジを終えて帰郷した者は故郷で敬意の念をもってむかえられ、その社会的威信はたかまり、「ハーッジー」という尊称で呼ばれたことが知られているが、シャブダンにとってもそれは新たな権威の源となったと考えられる。その証左として、20 世紀初頭においてシャブダンが従来のように「バートゥル」（遊牧英雄）ではなく、「バートゥル・ハーッジー」という尊称で呼ばれるようになったことが明らかとなった。こうした尊称が用いられた背景には、シャブダン本人、あるいはその周囲の人物たちに、「バートゥル」という従来の遊牧的な尊称に、イスラーム的な要素をつけ加えることで、当時にあっては実質をともなうことがもはや困難であった遊牧英雄バートゥルとしての伝統的権威を補強しようとする思惑があったものと推測される。

（3）しかし、注目すべきは、シャブダンとイスラームとの関わりがそうした伝統的権威の維持だけに終始しなかった点である。すなわち、シャブダンはイスラーム世界と地域社会とを結びつける媒介者となり、イスラームの代弁者となっていった。そのことは、いわゆる「新方式教育」（ジャディード）の導入において顕著に見られる。この運動は、ロシア帝国内においてムスリムがロシア人と対等に渡りあうためには教育改革が不可欠であるとの認識から、伝統的な寺子屋形式のマクタブを改革して、イスラームの基礎に加え、母語とロシア語の読み書きや算数、歴史、地理などの世俗化科目を、教科書を用いて学年別に教える近代的な初等教育の導入を目指すものであった。それは当初、ヴォルガ・ウラル地方のタタール人を中心に展開されていたが、20 世紀に入るとタタール人の商業ネットワークにのって中央アジアにも普及した。同時代史料から、シャブダンがタタール知識人たちとも結びながら新方式教育運動に関与していたことが明らかとなった。こうしたことから、新たなイスラーム潮流を介して社会の近代化を図ることが彼の念頭において意図されていたものと指摘することができる。

（4）20 世紀初頭におけるシャブダンのイスラーム実践がロシア支配とどのような関係にあったのか、その相互関係を明らかにした。
①シャブダンとイスラームとの関わりがより明確なものとなってゆくことを巡って、ロシア軍政当局はどのように対応したのだろうか。ロシア軍政当局はシャブダンがイスラームとの関係を強めつつあったことを明確に認知していた。さらにロシア人軍政官の中には、そうした動きに危機感をいだき、それを積極的に阻止するよう主張する者もいた。このように、ロシア軍政当局の中にイスラームの影響を積極的に抑止しようとする動きが存在していたことは確かであるものの、それはあくまでも例外的なものであった。概してロシア軍政当局は、シャブダンをはじめとするクルグズ首領層を、ロシア支配に敵対的な汎イスラーム勢力の一員と見なすよりは、むしろ民衆をそうした外部の影響から守るための防波堤として位置づけようとした。
②他方で、そもそもシャブダンがイスラームの代弁者としての顔を有するようになった背景には、ロシア帝国自体がそれを助長していた側面が少なからずあったという点も明らかとなった。シャブダンに限らず、ロシア帝国が意図せずして現地民のイスラーム化を助長したという指摘は同時代のロシア軍人たちによってもなされていた。その顕著な事例として、中央アジアにおける鉄道の敷設は、帝国中央への統合を強化するよりもむしろ、現地民のハッジを促進し、イスラーム世界との結びつきを助長することになったというパラドクスが知られているが、シャブダンもロシア帝国が敷いた鉄道を乗り継いでハッジを行なった。さらに、ロシア帝国がシャブダンに陸軍中佐位を授与した点も看過できない。ハッジに赴くにせよ、モスクを建てるにせよ、イスラームの代弁者としての体

裁を整えるためには、当然のことながら多額の資金が欠かせない。シャブダンがそうした資金繰りを具体的にどうのように行なっていたのか、詳細を明らかにすることは難しい。推測の域を出るものではないが、陸軍中佐位に付随して支給された年金の存在を看過することはできない。19 世紀末にシャブダンが年金額の増額を要求したこと、またハッジに赴く 1 年前の 1903 年には、1876 年のフェルガナ遠征での軍功に対して授与された軍事勲章（voennyi orden）にも相応の年金が支払われるべきであるとして、国庫総局（Glavnyi department gosudarstvennogo kaznacheistva）に年金 26 年分を請求したことをはじめ、過去の軍功を口実にロシア帝国から金銭的利益を可能な限り引き出そうとしていたことが明らかとなったが、そうした背景には活発化するイスラーム実践が大きく作用していたものと考えられる。以上のことから、20 世紀初頭にシャブダンに冠せられた「バートゥル・ハーッジー」という尊称は、ロシア帝国と無関係なものだったのではなく、むしろ帝国の軍事征服と統治の言わば副産物として生まれたものでもあったと言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①秋山徹、遊牧英雄からイスラーム的遊牧英雄へ：ロシア帝国の中央アジア統治と現地民コラボレーターの権威、イスラーム地域研究ジャーナル、査読無し、7 号、2015、19-39

②Tetsu Akiyama, Why Was Russian Direct Rule over Kyrgyz Nomads Dependent on Tribal Chieftains “Manaps” ? Cahiers du monde russe, 56(4), 2015, 625-649（査読有り）

〔学会発表〕（計１件）

①秋山徹、遊牧英雄からイスラーム的遊牧英雄へ：ロシア統治下中央アジアにおける現地協力者の動向をめぐる一考察、北海道中央ユーラシア研究会第 118 回例会、2015 年 6 月 25 日、北海道大学（北海道・札幌市）

〔図書〕（計１件）

①秋山徹、東京大学出版会、遊牧英雄とロシア帝国：あるクルグズ首領の軌跡、2016 年、243

６．研究組織

（1）研究代表者

秋山　徹　（AKIYAMA, Tetsu）
早稲田大学・イスラーム地域研究機構・研究助手
研究者番号：９０７０４８０９